

1 テキスト

「表現作用」「六」。161頁3行目から163頁13行目まで。

2 テキスト解釈

(第3段落)

第3段落において西田は、言語と芸術の表現の違いについて述べる。結論を先取りすれば言語は不完全な表現であり、芸術は完全な表現であると述べることになる。西田が言語によって「主観的精神」を超越して、「客観的立場」に立つという。さらに言語という「客観的現象」が「主観的内容を負ふ」(含む)ことによって「客観的精神が自己自身を現す」ともいう。そのため、思想は我々の「判断作用を超越」する。そのため、意味と言語の間には「内面的統一」がなく、単なる「符号」となる。

一方、芸術は表現する内容其物の中に、作用が含まれているという。つまり、表現作用の定義として「意味其物が働く、意味が実在を含む」とするのである。例えば、画や塑像は言語と異なり、意味其物の直接的な表現である。芸術家は自己の主観を客観に没入することによって、作為(作為なき作為)する。このことについて桑原氏が「木仏像」の例を挙げられた。西田の例では「彫刻家の頭にある塑像が美なのでなく、大理石の塑像が美なのである」という。また芸術のイデア(意味?)は自然以上の意味において「実在のイデア」でなければならない。作用其物を通して見られ得る実在の内容であり、働くことによって見られ得る内容でなければならないともいう。そのため、芸術家の創作は「イデア其物の創作作用」ということができる。

(第4段落)

表現作用においては実在的と考えられるものが意味の中に含まれるという。合目的的作用(生成変化)においても実在が目的の手段となると云い得る。しかし合目的的作用では理想的なるもの(意味、イデア)が実在的なるものを蔽うということはいできない。つまり、「作用の実在」によって「意味の実在」が維持されるのである。また、合目的的作用においては時が意味を支えているが、表現作用においては時は永遠なるものの影となる。言語においては意味と言語との結合が偶然となるため、表現としては不完全と考えられるが、一方では意味其物の超越性を見ることができる。一方で芸術においては、意味と表現との結合が内面的であるため、主観が客観の中に没し、客観に制約させられるという。しかし、芸術のイデアはどこまでも客観的実在(目に見える世界)を超越したものであり、自然界以上にその根拠を有するものでなければならない。自然界に対して自由の立場に立つ。そこに芸術的創作作用と自然界の合目的的作用の区別があるのである。作為なき作為の立場において主客合一をみることができ、この意味において芸術は言語よりも一層完全なる表現であるということができ、自然と言語はイデアの不完全な表現ということができる。

哲学的問い:「言語はイデアの不完全な表現である」とある。しかし、西田はその不完全な表現としての言語を駆使して純粋経験を表現しなければならないという根本的な矛盾にどのように立ち向かえたのか。